

死生学

DALS ニュースレター No. 6

東京大学
21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life

2004年7月1日

目次

巻頭 「死生学の領域」
島菌進

エッセイ「祖先から子孫へ 死者と生者の共生へ向けて」
小島毅

[図書紹介] 馬場恵二・三宅立・吉田正彦編 『ヨーロッパ 生と死の図像学』
小佐野重利

研究会・シンポジウム報告・案内

シンポジウム報告「墓地に映された生者の世界：日本とベトナム初期農耕社会の事例から」
今村啓爾

ピーター・シャーバー氏 講演研究会報告「幹細胞研究にまつわる倫理的諸問題」
一ノ瀬正樹

ローゼンバーグ氏 講演研究会報告「適応度・確率・自然選択原理」
一ノ瀬正樹

坂部 恵氏 講演会報告「他者の個人主義 生・死のはるけさについて」
松永澄夫

松尾 剛次（本プログラム特任教授） 公開講演会

今後の予定

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>

英語圏では「死生学」にあたるものが、一定の発展を見せている。その一端は、2004年4月8日にイギリスのグレニス・ハワース氏による講演「イギリスとヨーロッパにおけるデス・スタディーズの現状」において紹介されたし、『死生学研究』第3号の田中大介氏の論文「葬儀産業研究の可能性」でも紹介されている。だが、私どもの企てでは、当初から「死の研究」よりは、「死生の研究」(Death and Life Studies)がふさわしい用語であると考えられ、その考えのもとに研究計画が立てられてきた。このことの意味をどうとらえるかは、死生学の広がりをもどのようなものとするかという問題と深く関わっている。

この問題を考える手がかりとして、「死」ではなく、とくに「死生」という語で喚起されるものへの現代的な関心の由来について、いくつか思いつくところをあげてみよう。そもそも「死」とは「生」と不可分であり、「死」を取り上げれば「生」を取り上げざるを得ないといった説明の向こう側までいってみたい。

(1) ある種の文化、仏教や民俗宗教において、死と生を表裏の関係にあるものとする理解が浸透している。たとえば、「無常」は仏教の根本思想に関わるが、これは成長発展という生命の一面が衰亡消滅という他の局面と不可分の関係にあるという認識に基づいている。そこから宗教的な思考が立ち上がっていく。だが、現代人の中にそれに親しみを抱く者がいる。「永遠の生」よりも、「死と生の背中合わせ」にこそ、自己の落ち着き場所を見いだそうとする立場だ。

(2) ある種の文化では、生者は死者とともにあるという意識が強い。このことの現代的な意味を見直すべき時に来ている。死者の「恩」とともに死者の「恨」とともに生者はあると感じ続けてきた文化が懐かしい。現代世界では遠い他界を尊び、死者をかなたに追いやるタイプの文化が支配的となった後に、あらためて生者は近い死者とともにあるという、生活現場の感覚が再浮上し、その意義を問われ直している。

(3) 生老病死、つまりは死生の危機に関わって、かつて宗教と結びついた伝統文化や人の絆が果たしていた役割が、どんどん小さくなってきている。出産や成人の意味づけについて、また、生命力や生命の危機をめぐる儀礼など、かつて蓄えてきた豊かな文化資源が生活現場から遠ざかっていこうとしている。それについて再考し、新たな死生の文化をつかみとりたいという気持ちがさまざまな立場の人々の間で生じてきている。

(4) 現代の科学技術や専門家制度や権力システムは、生老病死のライフサイクルに深く入り込むようになってきた。かつては家族や共同体が担ってきた機能が外部化され、組織化されていく。軍隊、学校、病院、そしてケア・システムの全社会的組織化へと進む。それらと人と人との柔らかい交わりの中で生じる事柄、これが「死生のケア」の問題として浮上してきている。中で「死」や個人的な危機や倫理に関わる度合いが高いと思われる領域が死生学として意識されている。

(5) 生命倫理という領域が発達してきたのは、患者の人権が重んじられるようになったということとともに、専門化されたシステムによる日常生活の囲い込みが進行しているという事態と関わりがある。とくに医療は身体、心、さらには魂(霊)の危機に関わる専門領域となり、生死をめぐる重い判断に踏み込む機会が格段に増えてきている。そこで生じるのが生命倫理の諸問題だとすれば、その全体が死生学に関わるのではなからうか。

「死生」や「死生の危機」という語の解きほぐしはまだまだ不十分である。生を死との関わりにおいてとらえるということであれば、その限定づけは容易かもしれない。だが、「死生の危機」やライフサイクルの再考といった観点にまで広がっていくとどうか。たとえば、セクシュアリティや性教育、あるいは出産と家族のあり方は、広義の「死生学」の領域に大いに関わる。発達心理学や女性学といった広大な領域がそこに広がっている。だが、すでに形を現しつつある「死生学」の諸相を横目に見て、それをどう同じ地平にのせていけばよいのか、まだ検討すべき課題は多い。

エッセイ 「祖先から子孫へ 死者と生者の共生へ向けて」

小島 毅

今から十年ほど前、エマニュエル・トッド (Emmanuel TODD) の *L'Invention de L'Europe* が『新ヨーロッパ大全』という書名で翻訳刊行された (石崎晴己訳、全2巻、藤原書店、1992・1993年)。私も早速購入して読み、その構想の大きさと仮説の大胆さに舌を巻いた。要するに、「ヨーロッパ」といっても、歴史的に家族制度の構造が異なり、それに応じて思想文化も多様だという趣旨で、EUの安易な統合に批判的な著者の政治的立場を反映した論旨であった。

彼によれば、父子関係 (自由の観念) と兄弟関係 (平等の観念) を鍵概念として、家族の形態は次の4つの類型からなる。絶対核家族 (自由+非平等、イギリスなど)・平等主義核家族 (自由+平等、フランスなど)・直系家族 (権威+非平等、ドイツなど)・共同体家族 (権威+平等、ロシアなど)。前半の精緻な統計学的分析と後半のやや強引とも思える特徴分類との間に飛躍も感じたが、なかなかおもしろい仮説ではあった。

ただ、私には当初から彼の分析手法に不満があった。ヨーロッパを論述対象とする以上致し方ないことではあるのだが、類型の立て方自体がそもそも特殊ヨーロッパ的なのである。自由と平等といういかにも人類にとって普遍的らしく見える指標をもとにして、父子関係と兄弟関係のあり方という2本の軸を交差させた4象限で世界の家族制度を分類するその手法は、着想として卓抜なもの、そうすると西ヨーロッパにほとんど見られない第4類型共同体家族が、「ロシア、セルヴィア、ハンガリー、アルバニア、モンゴル、ヴェトナム、インド北部」、さらには「多くのシベリアの民族や、カザフのような中央アジアのいくつかの民族の特徴」となる (同書 巻120頁)。そして中国も。つまり、西ヨーロッパ以外の世界には共同体家族が広く見られ、逆に言って、西ヨーロッパには共同体家族がないという点で (著者の意図に反して) 共通する特性を持つことになる。著者によれば共同体家族は平等を高唱するが権威主義的な共産主義に親和的で、事実、西ヨーロッパでもイタリア中部やポルトガル南部など共産党の強い地域は共同体家族だそうである。上にあげた諸地域は (インドを除いて) 1980年代まで社会主義陣営に属していたわけだから、話としては実にうまくできている。

だが、家族制度の因子は父子 (親子) と兄弟の関係しかないのだろうか。もちろん、夫婦というのも重要な因子だろうが、ここでは触れない。私が当初から疑問だったのは、「祖先と子孫」という因子を考慮しなくてよいのかということであった。「それは親子関係の延長線上にあるものにすぎないではないか」と言うなかれ。私が問題にしたいのは、まさにそう言ってすませてしまう発想法なのである。

いわゆる『新約聖書』冒頭のイエスの系譜の記述の仕方、あるいは今でも西アジアの人たちに見られる名乗り方として、「誰その息子の誰その、そのまた息子の誰その、……」というのがある。素人がうっかり知ったかぶりをして火傷をしかねないが、Johnの息子がJohnsonさんだろう。わが鎌倉武士も「やあやあ我こそは……」と清和天皇 (もしくは桓武天皇) 以来の系譜を延々と述べ立てて一騎打ちの申し出を行った (とされる)。ところが、東アジアにはこれと全く異なる名乗りの仕方がある。「姓」である。

ある歴史上の (伝説的な) 人物を開祖として、個体識別のための名の上に子々孫々変わることなき標識をかぶせて人名 (姓名) とする慣習が、古代の中国に発生した。同姓不婚慣行や、古来結婚しても夫婦別姓である (漢族が残した史料では、女性を実家の名で「某氏」と称する) など、この姓なるものの重みは東アジアの文化的伝統とすら言える。Given name を surname (family name) より前に称する文化 (「AはBの子」式の伝統?) と違って、われわれは姓 (氏) を名よりも前に唱える。それは「祖先」を家族制度の根幹に据えているからであろう。同族集団を統合する目に見える道具立ては、祖先祭祀であった。

つまり、漢族の文明が浸透した東アジア地域においては、家族とは現に生きている成員のみで構成されるものではない。すでに亡くなった祖先、それも事によると歴史的には虚構に属する祖先（かくいうわたしも、なんと桓武天皇の子孫なのである）を戴いて、同族意識を創出・構成しつつ、その細胞として同居共財の家族が存在するという形になっている。これはかなりの程度理念的なものにすぎないが、逆にそうであればこそ、人々の意識を規制し、「お家の大事」をご先祖さまのために切り抜けようとする思考・態度につながっていよう。すなわち、代々続いた家（もしくはそれに準えて作られた組織。大学とて例外に非ず）を自分がつぶしては、先人たちに申し訳ないという想いである。話は飛躍するが、組織の自己防衛が不法行為や唯我独尊に走りがちなもの、こんなところに遠因があるのかもしれない。

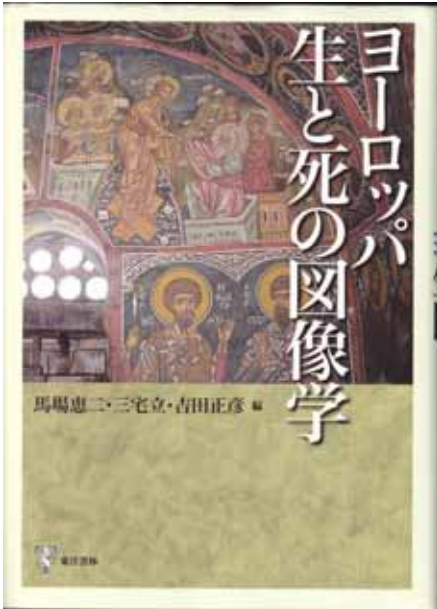
それはさておき、どうやらトッド氏の視野に「死んだ祖先」は入っていなかったようだ。「これが所詮は西欧人の限界さ」などとして顔して言うつもりはない。むしろ、そのことにわれわれ東アジアの研究者がきちんと応答していくべきではないか。管見の範囲でも彼の論旨に共鳴する社会学者がいたが、寡聞にして上述のような指摘がなされたかどうかは知らない。

環境倫理や生命倫理の分野で「将来にわたる重要事項を、現に生きている者たちの判断で決定してしまってもよいのか？」という問いかけがなされていると聞く。正論だと思う。今のわれわれの社会が、遠い昔のご先祖さまたちから預かり、未来の子孫たちに受け継いでいくべきものとしてあるのだと考えるならば、死者や未だ生まれぬ者たちと一緒に、ただし彼らはもの言わぬので生者がその立場を代弁して、彼らとともに考えていかなければなるまい。「祖先と子孫」という因子を加えることで、人間社会についての理解は厚みを増すであろう。日本発の「死生学の構築」に求められていることの一つではなかろうか。

< 図書紹介 > 馬場恵二・三宅立・吉田正彦編 『ヨーロッパ 生と死の図像

学』

小佐野重利



本書は、ニューズレターNo.4で紹介した論文集『生と死の図像学 アジアにおける生と死のコスモロジー』のヨーロッパ篇で、もともと明治大学人文科学研究会主催「生と死の図像学」公開講座で「図像学研究会」メンバーが行った成果発表に基づき編まれた論文集である。馬場恵二「キプロス島アシーヌウ聖母教会堂とキリスト再臨図」、尾崎和彦「北欧神話の図像表現 ゴスフォースの十字架に見る生と死のモチーフ」、富田知佐子「ロシアにおける聖母崇拜について “守護” と “癒し” の主題を中心に」、山田恒人「道化師たちの変容」、薩摩雅登「ティルマン・リーメンシュナイダーの《聖血祭壇》」、吉田正彦「リヒモーディス・フォン・アドゥフト夫人の生還」、野田隆・川田玲子「メキシコ史と図像 グアダルーペの聖母とフェリーペ・デ・ヘススを中心に」、三宅立「第一次世界大戦の図像学 ドイツ美術における 死と再生」の8篇

の論考を収める。口絵カラー59点のほか、ふんだんに挿図を使って、歴史、宗教哲学、美術史、演劇史、文学を専攻する研究者たちが、北欧からメキシコまで含む広義の「ヨーロッパ」の図像について「生と死」という切り口から論じようとした意欲的なものである。

コンテンポラリー美術をひとまず措くと「生と死」は人類のほとんどすべての造形活動あるいは造形作品を括るのにいたく便利なタームである。「死生学の構築」という本COEプログラムの研究課題に対しても、「素晴らしいテーマを思いついた」とよく美術史研究者たちから冷やかし半分の褒め言葉を頂くが、そのたびに返答に窮する。特に洋の東西の図像を比較検討するシンポジウムや公開講座・研究会の場合には、恰好の包括的なテーマとなりうる反面、議論の焦点を絞るのにも本書のような論文集を編むのにもいささか茫漠としすぎ、厄介なのである。収められた論考には、聖母・聖人崇拜、再生と復活、終末論といったキリスト教的な論点のほかに、癒し、死からの生還、追悼などの民間あるいは土着の信仰がキリスト教と交錯する論点があり、「生と死の図像」の多様性が一目瞭然となるものの、このテーマに起因する難点もややみられる。各論者による個別事例研究の成果としては評価したいが、論文集が全体として「生と死」のテーマを単に多様性の提示にとどまらず、どのような切り口から各論考の論点を切り結び、掘り下げ発展させようとしたのかがなかなか読み取れないのである。

以下、紙幅の関係から2篇の論考について紹介する。吉田正彦氏の論考では、フォン・アドゥフト夫人の死からの生還の伝説が「事実」をいかにも事実として示すため伝説に仕立てあげられた経緯が考察される。中世の例話（エグゼンプラ）にもしばしばみられるこの「蘇生」のテーマは、ペストの蔓延や戦争による殺戮が頻繁にあった時代に、大量死のなかで現代医学から見た「死の確認手続き」をされずに仮死状態のまま埋葬され、何かのきっかけで蘇生する人々が実際にいたことを思い起こさせる。死と死者を身近な存在と感じながらも、死者を敬いつつ断固と距離をおこうとした中世人の心性が、妻の生還を信じようとしないう夫フォン・アドゥフトにはあったのではないか。ヨーロッパ中世人の死生観の問題に伝説あるいは例話の検討から迫った興味深い論

考である。三宅立氏の論考は、史上最初の総力戦となった第一次世界大戦による大量死に、3人のドイツ人画家ルートヴィヒ・マイトナー、マックス・ベックマン、オットー・デックスが従軍というそれぞれの戦争体験のなかでいかに向き合い、どのような図像表現を生み出したかを社会政治的コンテキストと絡め論じている。彼らの戦争図像にはキリスト教の伝統的図像(「最後の審判」、「黙示録的情景」など)からの形態的影響が認められる一方、「死と再生」をめくり創出された独自の作品にはニーチェ思想が色濃く翳をおとす。総力戦における「英雄的な死」あるいは「無惨な死」とそれに対する国家的あるいは個人的な追悼装置としての美術の問題に関心のある方には一読を勧めたい。第二次世界大戦後に、デックスはホルバインやグリユネヴァルトの祭壇画に想を得た三連祭壇画形式の戦争制作の動機について回想し、制作当時(1933年のナチス政権確立の前年)ヴァイマル共和国では、第一次大戦の塹壕でとくに不条理であると証明されていたはずの英雄的行為や英雄主義がふたたび喧伝されていたため、戦争の恐ろしさを伝え、戦争を阻止する力を呼び覚まそうとしたのだ、と語ったという。「死生学」の一つのトピックスとして、戦争と造形美術あるいはメディア芸術の関係はまだまだ掘り下げる必要がある。(A5版610ページ、東洋書林、2004年3月31日、本体9500円)

シンポジウム

「墓地に映された生者の世界：日本とベトナム初期農耕社会の事例から」

今村 啓 爾（考古学研究室）

5月16日（日）法文2号館1番大教室において「死生学の構築」の一環として、表記のシンポジウムが開催された。本プログラムによって出版されたばかりの発掘調査報告書「The Lang Vac Site（ランヴァク遺跡）」の内容に沿って企画されたものである。

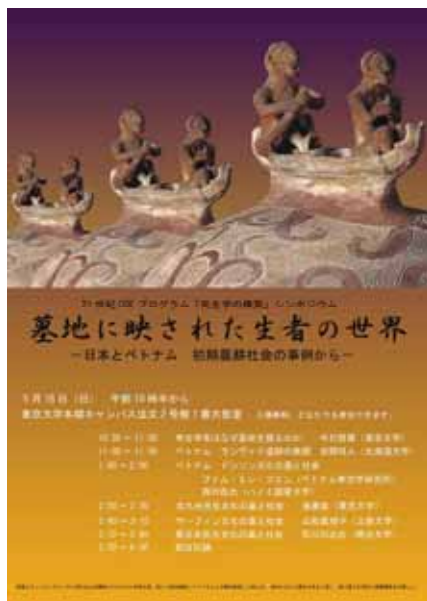
この調査報告書についてはじめに紹介したい。1990年と1991年、考古学研究室の今村は大学院生を引き連れ、ベトナムの考古学研究所と共同で、ゲアン省ランヴァク遺跡の発掘調査を行った。この遺跡は、日本でいうと弥生文化に近似するドンソン文化の墓地を主体とするものであった。特徴的な構造の墓、多くの青銅器や土器を副葬された墓葬群の発掘は、当時の葬制や社会構造を知るうえで貴重な成果をもたらした。調査自体は本プログラムよりはるかに先行して始められたわけであるが、死者の取り扱いを手がかりに当時の社会を読み取る研究のとりまとめは、「死生学」に相応しいものであった。

今回のシンポジウムはこの報告書の出版記念も兼ね、考古学研究室によって企画された。司会は大貫静夫教授が担当した。ランヴァク遺跡の報告書そのものは非常に特殊な内容であるので、シンポジウムではテーマをやや広く取り、ベトナムのドンソン文化と日本の弥生文化の墓を比較し、それを題材に考古学者はどのようにして墓地から当時のひとびとの思想や社会の復元を行うのかという一般向けの内容に工夫された。7名の演者とそれぞれの話題は次のとおりであった。

- 今村啓爾（東京大学）「考古学者はなぜ墓地を掘るのか」
- 吉開将人（北海道大学）「ベトナム、ランヴァク遺跡の発掘」
- ファム・ミン・フエン（ベトナム考古学研究所）・西村昌也（ハノイ国家大学）
「ベトナム、ドンソン文化の墓と社会」
- 後藤直（東京大学）「北九州弥生文化の墓と社会」
- 山形真理子（立教大学）「サーフィン文化の墓と社会」
- 石川日出志（明治大学）「東日本弥生文化の墓と社会」

最初に今村が時代を限定せずに考古学者が墓地を発掘する目的について話し、シンポジウムの導入とした。次に大学院時代にランヴァク遺跡の発掘に参加した現北海道大学の吉開将人助教授がこの遺跡の概要と発掘成果について多数のスライドを交えながら紹介した。

午後の講演はベトナム考古学研究所のファム・ミン・フエン助教授（女性）から始まり、ドンソン文化の墓から読み取られる社会の状況について話された。氏は、ランヴァク遺跡の調査時にベトナム側パートナーの1人として参加され、2ヶ月におよぶ長い発掘で苦労をともにしたかたである。この講演はハノイ国家大学の客員研究員西村昌也氏が通訳をされたが、氏もまた大学院時代にこの発掘に参加し、その後ベトナムにとどまり多くの調査を行ってきた。ドンソン文化期の墓には豊かな墓と貧しい墓があり、社会の階層化がうかがえる。多くの武器を有する戦士の墓、鍛造工具を有する特殊技術者の墓などから、職業の分化も認められることが報告された。





この講演と対をなすのが本学後藤直教授による「北九州弥生文化の墓と社会」で、同じころ日本の先進地域であった北九州の甕棺墓地を主な題材とし、階層分化が進み、王墓が出現する過程が報告された。吉野ヶ里遺跡墳丘墓に葬られた青銅武器をもつ人たちを社会的上位の一族としてとらえる見解が普通であるが、その遺骨の遺伝学分析では、意外に血縁の離れた集団とされ、むしろ戦闘指揮者のような特殊任務の人たちを葬った墓地であろうという新説が紹介された。中国という先進地域をはさんで両側に位置する日本とベトナムで、同じころ同じような

社会の動きがあったことが墓地から読み取れるのである。

次に立教大学の山形真理子講師が「サーフィン文化の墓と社会」について話された。山形氏も大学院時代にランヴァク遺跡の調査に参加したことがきっかけでベトナム考古学を手がけるととなり、現在は中部ベトナムにおける国家形成期を主な研究テーマとされている。西暦紀元前後の中部ベトナムには、甕棺墓地を特徴とする文化が広がるが、物品の動きや遺跡の立地から海上交通・河川交通に長じた人たちが残したものと考えられ、その墓地には海上他界観が色濃く反映されていることが紹介された。

最後に明治大学の石川日出志教授によって「東日本弥生文化の墓と社会」が報告された。東日本でもサ・フィン文化と類似する再葬甕棺が用いられていた。その一括埋葬の状況は、生前小集団に分かれて生活していた人たちが、墓地を共有し、甕棺を一ヶ所に集めて埋葬したことを思わせる。縄文中・後期の集落が解体し小集団に分散した後も、もともとの紐帯を維持するために共同で墓地が営まれたと、その社会的背景が推定された。

最後に全講演者に拠点リーダーの島園教授、国文学の多田教授を加え総合討論がおこなわれた。本日の講演は考古学の個別的話題に向かうことが多かったが、総合討論では細かい話を意識的に避けながら、現在開拓されつつある死生学という分野の中で考古学による墓の研究がどのように位置づけられるか、議論が交わされた。

考古学者は墓掘りに熱中し、墓や死の形というものに特別の興味を持っているように見えるかもしれない。しかし彼らが知りたいのは、実は古代の人々が生きていたときの社会であり思想なのである。文字をもたない人たちにとって墓を作るという行為は、自分たちの思想の一端や社会の形を目に見える形で後世に残す最大の機会であった。考古学者は墓地という死の固定化された形を手がかりに、生者の社会や思想を読み取ろうとしている。これが本シンポジウムのタイトル「墓地に映された生者の世界」の意味である。島園教授は、生と死が一体であるように生者の世界と死者の世界も不可分であることを強調されたが、考古学もその両者をつなげようと努力しているのである。

当日はあいにくの雨天であったが、それでも70~80名の参加者は最後まで、熱心に講演に聞き入り、質問やフロアからの発言にも加わられた。今回のシンポジウムは、長い歴史と大きな蓄積を有する考古学の墓葬研究が、死生学という新しい総合的分野の中にどのように位置づけられるか、広い視野から考えるよい機会になった。

ピーター・シャバー氏講演研究会
The ethical problems of stem cell research
(幹細胞研究にまつわる倫理的諸問題)

一ノ瀬 正樹

去る2004年3月8日、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室において、Peter Schaber 博士講演研究会・「幹細胞研究にまつわる倫理的諸問題(The ethical problems of stem cell research)」が開催された。午後3時よりの開演で、30名ほどの聴衆が参加した。Peter Schaber氏はスイスのチューリッヒ大学助教授で、倫理学・応用倫理学の専門家である。講演は、「胚性幹細胞の研究利用」という、きわめて今日的な倫理的問題に正面から取り組んだものであり、大いに聴衆の関心を刺激した。この問題は、本COE代表者である島園進先生も公的な形で関わり、発言されている主題である。幹細胞研究は、一方で、再生医療という大きな夢を促進する研究と捉えられつつも、他方で、研究自体の倫理的問題性もあり、そしてクローン人間を作る技術と紙一重であることから、クローン人間をなし崩しに容認する道筋を作ってしまうのではないかと、という懸念ももたれている。いずれにせよ、私たち日本人にとってもきわめて切迫した課題であるといわなければならない。



Schaber氏は、幹細胞の研究利用に対する反対論を一つずつ取り上げ、それを検討する、という形で議論を進めた。胚性幹細胞を研究目的に使ってはならないとする議論として、「胚と成人した人間とは同一人物であるとする「同一性議論」、胚は潜在的人格であるとする「潜在性議論」、胚を含むすべての形態の人類は尊厳性を持つとする「尊厳性に基づく議論」、を取り上げ、Schaber氏は、最終的にこのいずれも論証に成功していないと論じた。そして、胚性幹細胞はそれ固有の価値を持っているし、また研究目的だけのために胚を作ることは、まるで胚を事物のように扱うことになり容認できないし、クローン人間の製作ももとより容認できない、という但し書きをつけながらも、生殖医療における残余の胚性幹細胞を研究に利用することは道徳的に不正とはいえないし、それが必ずクローン人間の製作に結びつくともいえない、という論を展開した。これだけ刺激的な論点を提起されたので、質疑の時間になると、たくさんの質問が出て、大いに議論は盛り上がった。たとえば、胚が潜在的人格であるとする「潜在性議論」に対して、Schaber氏は、そのことが胚と成人とを道徳的に同様に扱う理由にはならない、としたわけだが、環境問題に関する世代間倫理を考えれば分かるように、まだ人格になっていない潜在的な存在者を道徳的に考慮することにおかしな点はないのではないか、という質問が出た。Schaber氏は、これに対し、胚のような「潜在的人格」と未来世代のような「可能的人格」との相違がそこには関わっているのではないかと答えてくれた。また、私自身が、「尊厳性に基づく議論」に関して質問した。Schaber氏は、胚は現に人格ではない以上、人格と同じ意味での尊厳性を帰しえない、と論じたが、現に人格として存在していないという点では胚と同じはずの「死者」に対しては、私たちは尊厳性を帰すことがあるのではないか、という質問である。Schaber氏は、死者は、胚と違って、歴史をもつので、扱いが異なるのだ、と応じてくれた。まだまだ論ずべき問題が山積みされているが、そのことを大いに自覚化してくれたという点で、Schaber氏の講演は実に有意義であった。講演後の懇親会も続きの質問で大いに盛り上がり、COEの活動も本格的な軌道に乗ってきたと実感した次第である。

アレックス・ローゼンバーグ氏 講演研究会

Fitness, probability, and the principles of natural selection

(適応度・確率・自然選択原理)

一ノ瀬 正樹

去る2004年5月18日、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室において、Alex Rosenberg 教授講演研究会・「適応度・確率・自然選択原理(Fitness, probability, and the principles of natural selection)」が開催された。午後5時よりの開演で、自然科学系の研究者も含めて、30名を越す聴衆が参加した。Alex Rosenberg氏はアメリカのDuke Universityの教授で、主として科学哲学の分野で多くの業績を残してきた研究者である。とりわけ、氏は、進化理論の哲学に関する専門家であり、本COE「死生学の構築」が、「死」だけでなく「生」をも扱うプロジェクトである点を鑑みて、進化理論にまつわる哲学的問題の講演を企画したのである。実際、進化理論に基づいて「殺人」現象を理解しようとする進化心理学の立場などもあるし、子供のために自らの命を犠牲にするような利他的行為も進化理論的に説明されることがしばしばあることから分かるように、進化理論と「死生学」は浅からぬ関わりをもつといえるのである。



Rosenberg氏は、まず、自然選択の原理を「集団」の「中心的傾性」に関して適用し、「個体」には適用せず、そして「適応度」を客観的確率として理解する、という現在有力な見方を紹介し、それを検討することから議論をはじめめる。この立場は、客観的確率として、より多くの子孫を残す「傾向性」(propensity)、あるいは「相対頻度」(relative frequency)のいずれを取るかによって、異なった形態がありうる。Rosenberg氏は、こうした確率概念に焦点を合わせて、批判的議論を展開する。「相対頻度」として「適応度」を考えた場合、有限系列の事象をどう理解したらいいか、という基本的問題に直面する。また、「傾向性」として「適応度」を捉えるときには、どういう「傾向性」かを決めるのに自然選択についての先行決定を必要とするという循環に陥る。さらに、そもそも、「適応度」が低いものがより多くの子孫を残すという現象に対しては、これらの確率的アプローチは有効でない、とも指摘する。そうして氏は、自然選択原理と熱力学第二法則とを類比させるパース以来の見方をも斥けた上で、適応度を正しく理解するには、「選択」と「(遺伝的)浮動」とを明確に区別することが最も大切であり、そのことは「集団」ではなく「個体」に対して「適応度」を測っていくことを要請するのだ、と論じた。なかなか難解な講演だったが、質疑の時間になると、さまざまな質問が出て、議論は大いに盛り上がった。とりわけ、「確率」の概念の用法について、私自身の質問も含めて、複数の質問が出た。私は、Rosenberg氏が、「個体」レベルの「適応度」を語るときにやはり「頻度」としての「確率」を問題にしつつ、同時に「原初的条件」を明らかにすればすべて決定論的に理解できる、と論じた点に関して、そこでの確率と決定論はどう両立するのか、と尋ねてみた。Rosenberg氏は、原理的なレベルで決定論を取ることと、実際のレベルで確率を用いることとの相違である、と答えた。その他、理論的にさらに議論を重ねるべき問題が多々あったが、進化理論の哲学が現在どのような文脈で論じられているのかを十二分に知ることができ、大いに有意義な講演研究会であった。講演後、本郷三丁目の地下鉄駅の近くで懇親会を行い、たくさんの方が出席した。他大学の研究者や理科系の研究者も交えて、さまざまな議論が飛び交い、「死生学」プロジェクトが広がりゆくさまを実感した。

坂部 恵氏講演会「他者の個人主義 生・死のはるけさについて」

松 永 澄 夫



2004年度布施学術基金講演会が、5月26日、東京大学法文2号館1番大教室で開催された。講演者は坂部恵東京大学名誉教授、演題は「生・死のはるけさ」というものであった。なお、今回は、21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる『死生学』の構築」との共催となった。

斉藤明教授の全体司会のもと、最初に稲上毅研究科長の挨拶、続いて本プログラム拠点リーダーの島菌進教授の挨拶があった。故布施郁三氏のご家族にもご臨席たまわった。

講演は、夏目漱石の「私の個人主義」という、1914年の講演を取り上げることから始まった。それは、西洋の文明を取り入れ始めた明治期以降、個人主義の確立はずっと日本の知識人（あるいは民衆）にとって課題であり続けた、という問題関心からのものだと思われた。それから話は、和辻哲郎の「人間」という概念の背後にある、日本の「村」的メンタリティの指摘へと進み、一転して、西洋における個の思想の淵源として、ノミナリズムと神秘主義とを指摘することに向かった。ここから、近代民主主義が生まれたというのである。

要点は、各人が神に直結する、とするところから、信徒の平等という考えがおのずと帰結するということにある。そして、個の原子化という危険に対する歯止めとしては、経験論の社会哲学では自然法が考えられたのだと言う。

話題は更に、神秘主義の源流をたずねて、ギリシャ教父から始まる東方キリスト教思想の伝統にまで及び、ここで「大乘キリスト教」という刺激的な表現も出てき、幾人かの聴衆をうならせたようである。それから、キリスト教と仏教との、化身の概念を巡る照合の話があって、坂部先生ならではの論展開となった。最後に、演題である「生・死のはるけさ」における「はるけさ」という語がどのような意味内容、語感をもつものか、その説明があった。やまと言葉を大切にし、それを手がかりに思索を進めるといふ、先生の一つの方法がみられた話である。聴衆が、生と死とについての新しい見方へと開かれるために、この語に導かれてどのような事柄に想いを馳せたか、興味深いものがある。

松尾 剛次（本プログラム特任教授） 公開講演会

7月6日 17:00-19:00 文学部 219 教室

「死の中世 官僧・遁世僧モデルの立場から」(司会 末木 文美士)

本講演では、官僧・遁世僧モデルの立場から、僧侶と葬送とくに死体との関わりなどに関して触れ、鎌倉時代に生まれた仏教の新しさについて具体的に論じてみる。

日本仏教の特徴の一つとして葬式仏教というのが挙げられる。日本の僧侶は葬祭に従事し、その収入に僧侶は大いに依存している。現在の日本人が僧侶に出会うのは葬儀や法要のほんの限られた時にすぎず、日本人にとって僧侶が葬式に従事するのは昔からのあたりまえのようになってきている。しかし、このように日本の僧侶が庶民の葬式までも一手に引き受けるようになったのは、必ずしも古いことではない。実に、鎌倉時代に教団を確立した遁世僧と呼ばれた僧侶たちの努力によって以来のことであった。遁世僧は、官僧（官僚僧）身分を離脱して、葬式など官僧にとって制約のあった種々の活動に従事した。それは、遁世僧が官僧の制約から自由になり、葬送・死・死体について新しい見方を有したことによる。こうした遁世僧によって日本的な死生観が創造され、一般に広められていった。

なお、ここでいう遁世僧というのは、いわゆる鎌倉新仏教僧のみならず、明恵・叡尊・忍性ら旧仏教の改革派とされた僧たちも含んでおり、彼らが墨染めの衣をいわば制服としたことから黒衣とも呼ばれた。

参考文献

拙著『お坊さんの日本史』NHK出版、2002

拙著『鎌倉新仏教の誕生』講談社、1995

拙著『救済の思想 叡尊教団と鎌倉新仏教』角川書店、1996

7月14日 17:00-19:00 文学部 316 教室

「死生学と中世律僧」 (司会 菅野 覚明)

本講演では、奈良西大寺叡尊をいわば祖師とする中世律僧に注目しながら、律僧と死・死体・葬送との関係に注目する。叡尊とその教団については、興福寺末寺の西大寺を拠点としたことから、彼らの活動の独自性について疑問がないわけではない。すなわち、大和の守護として強大な権力を行使した興福寺の末寺としての活動ではないかとも考えられている。そこで、まず興福寺との関係を明確にさせ、彼らが独自の立場にたっていたことを明らかにする。そのうえで、光明真言会の創始、文殊信仰と追善、葬式の担い手としての齋戒衆、死の美術の創造者としての律僧などについて論じる。それらを通じて、ともすれば不浄とされ死穢の発生源として忌避された死体が、穢れが消えて成仏した存在として尊重されるようになっていったことなどを論じる。

参考文献

拙著『日本中世の禅と律』吉川弘文館、2003

今後の予定

ロジャー・クリスプ教授(St Anne's College, Oxford) 講演研究会

"Whose Lives and Whose Deaths? : The Quality-Adjusted-Life-Year and Scarce Medical Resources"

(誰のいのちなのか、誰の死なのか - 生活の質で調整された余命と希少な医療資源)

2004年10月14日(木) (予定)

講演研究会「人生の意味——医療とスピリチュアリティ」

講演者 : ウェルナー・フート(ドイツの精神科医)

ヴァルテマール・キッペス(臨床パストラルケア研修所長)

2004年10月30日(土) 文学部 215 教室

公開シンポジウム「べてる に学ぶ——《おりていく》生き方」

11月5日 13:00 - 15:30 (第一部)

医学部(本郷キャンパス) 鉄門講堂

(16:00-17:30 第二部は公開されません)

パネリスト ; 川村 敏明(精神科医、北海道)

向谷地 生良(北海道医療福祉大学教授)

伊藤 由利子(ソーシャルワーカー、北海道) ほか

田口ランディ(作家) 市野川容孝(東京大学助教授)

司会 ; 上野 千鶴子

公開シンポジウム「生死をめぐる同意と決定」

第1部「不確実性に向かうことの哲学——認識的限界、確率、意思決定」

12月11日(土) 11:00 - 文学部 1大教室

第2部 「生き死にの選択」

12月12日(日) 13:00 - 文学部 1大教室

詳しくは、ホームページ (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>) でご確認下さい。

事業推進担当者

(拠点リーダー)

島園 進 <宗教学>

(第一部会：死生学の実践哲学的再検討)

竹内 整一 <倫理学・世話人>

熊野 純彦 <倫理学・世話人>

一ノ瀬 正樹 <哲学・世話人>

松永 澄夫 <哲学>

関根 清三 <倫理学>

榊原 哲也 <哲学>

(第二部会：生と死の形象と死生観)

小佐野 重利 <美術史・世話人>

木下 直之 <文化資源学>

大貫 静夫 <考古学>

(第三部会：死生観をめぐる文明と価値観)

下田 正弘 <インド哲学仏教学・世話人>

多田 一臣 <国文学>

市川 裕 <宗教学>

池澤 優 <宗教学>

(第四部会：生命活動の発現としての人間観の検討)

武川 正吾 <社会学・世話人>

横澤 一彦 <心理学>

立花 政夫 <心理学>

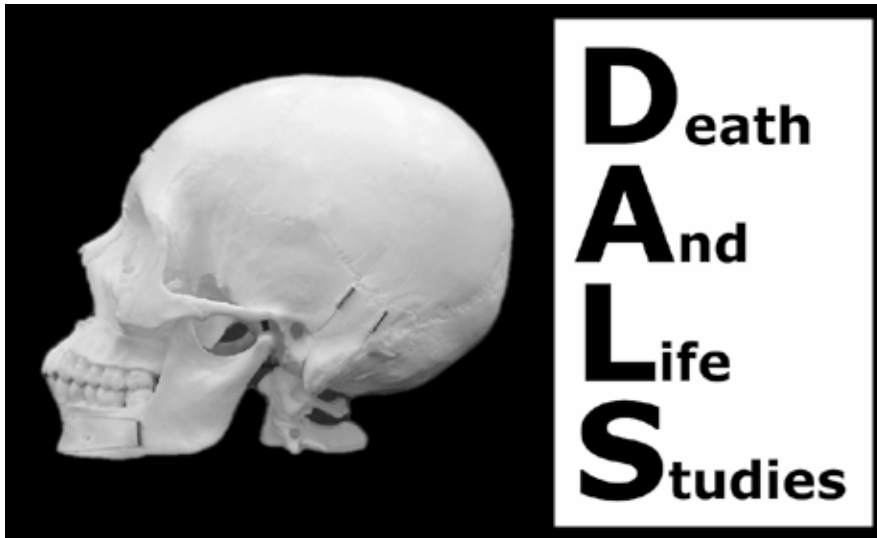
林 徹 <言語学>

赤林 朗 <医療倫理学>

甲斐 一郎 <健康科学>

西平 直 <教育学>

秋山 弘子 <社会心理学>



「DALIS ニュースレター」

第6号

平成16年7月1日発行

東京大学大学院人文社会系研究科

21世紀COE “生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”

責任者 島菌 進

TEL & FAX 03-5841-3736